

イタリヤ文学史 I 中世篇 奥付 デ・サンクティス著 池田廉・米山喜晟共訳 現代思潮社刊 一九七〇年二月一日初版 二一〇〇円 株式会社東京創文社印刷所本文印刷 形成社印刷株式会社装本印刷 橋本製本所製本

株式会社現代思潮社 東京都文京区小日向一丁目四十八番地 電話 営業部代表(九四三)四四〇六 出版部代表(三五三)八一〇一 振替東京七二四四二 郵便番号 一一二

© Kiyoshi Ikeda, Yoshiaki Yoneyama, 1970.
0098-60128-1909

十三世紀から現代まで、イタリアの文学は他のヨーロッパ諸国とおなじく、ゆたかな長い歴史をもっている。ダンテ、ボッカチオ、マキアヴェリの時代、イタリアが西欧文学界の最頂点に位置していたあの時代から、英仏独露の近代文学に較べてやや僻隅の感がある。したがってわが国にもさほど知られなかったその後の三世紀の間、イタリア文学の歴史は、全体として、他国の文学とは違った独自の特徴と個性的な展開を示している。

ただたんに教科書ふうに、作家と作品と文学集団の推移を年代順に配列したにすぎない文学史ではなくて、一国の文学をその本質においてつかみだし、一貫した論理によって展開し、しかもその根底に、著者の見識、世界観と審美眼とが光彩を放っているような、そういう文学史でなくては、文学を愛し、深く理解しようとする人びとの、ほんとうの要請にこたえることはできない。そしてこのような文学史は、一人のすぐれた文学史家の手によって書きおろされる通史としてしか、うまれえぬものであろう。

近年刊行される文学史の多くは、どの国の場合を考えてみても、文学研究の専門化、精密化の傾向とあいまって、時代別、ジャンル別、あるいは作家別と分担されたそれぞれの専門家の筆になる浩瀚な研究の集積である。その正確さ、精密さ、周到さはますます度を加えてゆく。もとよりそうした型の文学史の有用性、尊重すべきことに疑いをさしはさむものではないが、それを通読してみても、一貫した強い印象をうることがなく、いよいよ細かい無数の知識の重荷を背負いこまされたような感じをうけることも、また否定できない。その国の文学の、琴線のようなものに触れたいという、心ひそかな願いは満たされずに終わってしまう。

フランチェスコ・デ・サンクティスの『イタリア文学史』が出版されたのは、今年から数えてちょうど百年前のことである。彼の時代にも、またその後今日まで、イタリア文学の通史は、数々の類書があるが、それでいて、今なお本書だけが、毎年版をかさね、次々と刊行される廉価本や豪華版をとおして、広い範囲にわたって愛読されているのは、本書が上述したような要求にこたえるものを根源にもつているからであろう。文献実証的に見るならば、デ・サンクティス以後の批評家たちがその点だけを綿密に調

べあげて、問題にしたように、いくつかの間違ひをおかしている。それは、当時の知識水準としてやむをえない過ちであり、またときには彼自身の記憶違いによることもあった。だが、それにもかかわらず、一世の間、この書物はつねに新鮮な魅力を読者にあたえつづけてきたし、今後においても、埃まみれの「古典」の一冊として棚上げされてしまうことは、なかるうと思う。

では、そのような本書の魅力は、どこからくるのであろうか。だがそのことにふれる前に、著者フランチェスコ・デ・サンクテイスについて簡単に紹介しておきたい。(第一巻の巻末に掲げた、著者の年譜をも参照されたい。)

一八一七年、イタリヤ国家統一の革命前夜とも呼べるこの年、デ・サンクテイスは、ナポリに近いアヴェリーノで生まれた。当時、ナポリはブルボン王家の専制支配下にあつて苦しめられており、彼の父と叔父たちは、炭焼党員らの革命派の動きに深い関心をよせていた。その叔父の一人がナポリで私塾を開いていた関係もあつて、早くからナポリに出て、当時有名な文学者プオーティの塾に学んだ。一八四八年、民族解放の革命運動がイタリヤの各地で爆発したとき、彼もまた、教え子の学生と一体になつてナポリの乱に参加した。その直後に逮捕され、三年間、投獄され、さらに一八六〇年に、国家統一がほぼ完成をみるまで、ナポリ王国から追放され、亡命生活をよぎなくされた。一時、自由の天地トリノに避難していたが、その後チューリッヒ工科大学に招かれて、イタリヤ文学を講じた。ガリバルデイの率いる千人隊の活躍により南伊が解放されると同時に帰国。国会議員に幾度も選ばれ、一八六一年、六二年の二度にわたつて文部大臣となり教育改革に当つた。学校教育の問題は制度の問題ではなく、人間の問題であるという信念のもとに、かれは大学のスタッフの総入れ替えを断行し、ブルボン王朝の支配下で迫害されていた有能な在野の研究者たちを数多く大学の門に迎え入れ、大学に新風を吹きこんだ。その後の十年間、かれはもっぱら政治活動に傾倒したが、その活動のすべてをつらぬいているロマンティックな理想主義と、新しい時代の民衆教育を旨とする使命感は、以後の評論活動を支えるパトスとして作用したと考えられる。

統一後のイタリヤの政界は、カヴール派とガリバルデイ派との対立がしだいに深刻になつていった。その政界の動きのなかで、かれは最初カヴール派の穩健な路線に近く、のちに新左派の結成を志したこともあつたが、概して現実的な理想主義者という立場をとり、そう急進的な考えの政治家ではなかつたといえる。ところで、デ・サンクテイスの文学研究の意欲は、こうした十年におよぶ政治活動のあとでも、少しも衰えることはなかつた。それどころか、一八七〇—七一年に書かれた主著『イタリヤ文学史』そのものがはつきりと物語っているように、かれの文学批評は、新政府の重要な政治家としての体験をおして、いちだんと深みを加え、完成の域に到達した。一八七一年に、ナポリ大学の比較文学の教授となり、それ以後の講義をもとにして、『十九世紀イタ

リア文学』（一八七四）、「レオバルディ研究」（一八七六）をまとめ、ついで、『新評論集』（一八七九）を発表した。これはダンテ、ペトラルカ、グイチャルディーニ、バリニ、フォスコロについての評論集であった。質量ともに充実したこの期のかれの評論は、イタリア・ロマン主義後期の、文芸批評の金字塔を確立したものと云えよう。

その間、再び文部大臣におされて二期約二年半ほど、初等教育の普及に取り組み、一八八一年病をえて文相の職を辞し、ナポリで余生を送っていたが、八三年、世を去った。六十六歳であった。晩年のデ・サンクティスの批評活動において注目すべきは、しだいにロマン主義からリアリズムへの関心を見せ始めたこと、『ソラ論』、『リアリズムの原理』、『科学と人生』などの評論で、新しい問題を提起したことであった。

さて、デ・サンクティスの文芸批評の最高の表現であるこの『イタリア文学史』は、成立の事情からいえば、一八六三年頃に遡ることができるようである。この年の春に書かれた一友人あての手紙のなかで、それ以前に書き綴った論文の内容を、文学史という枠組みのなかで有機的に再編成してみたいという気持をもらしている。しかも一八六五年から七〇年にかけては、同時代の著名な文学史をとりあげて、それを文学研究の方法論の立場から鋭く批判し、かれ自身の文学史の理論的準備を完了している。ところで実際に、ナポリの出版社モラーノと、高校生向きの文学史を書くという出版契約がまとまったのは、一八六七年のことであった。出版社からは最初、教科書用にといいことで、平易なものを一冊本で書くようにという依頼であったが、いざペンをとりはじめると、著者の表現意欲は奔流のように溢れでて、予定の頁数をまたたくまに上廻り、ずっと内容に富んだものになった。そのため一度は出版社に懇願して二冊本の体裁をとることを認めてもらったものの、その予定枚数でさえ、さらに不足を感じるしまつてであった。こうして本書は、二冊本の形で、一八七〇年夏第一巻が、翌年末第二巻が出版されたが、その構成上の欠点は、結局末尾の章にしわ寄せされることとなり、近代文学についてかなりいいそがしい叙述となって現われた。そのすぐあとで、かれが『十九世紀イタリア文学』を書いたのも、本書のそうした欠点を補い、内容を強化するというねらいがあったのである。

それにしても、『イタリア文学史』が、さきにもふれた文献実証上の瑕瑾をもち、またこうした構成上の弱点をもちながら、イタリヤの名著中の名著として高い評価を保っているのは、そうした欠点を補ってあまりある強い魅力を放っているからである。

第一に、その規模の雄大さである。この文学史は、芸術の一ジャンルとしての文学の歴史に限定されていない。啓蒙主義の時代に、合理的な考え方の名のもとで、絶対視された文学の様式の区分などかれの念頭にはない。抒情詩、叙事詩、喜劇、悲劇、小説などの文学様式だけにとどまらず、歴史叙述、哲学、思想、科学の論文までが、狭い意味での文学と同等の重みをもって、かれの

文学史のなかに編みこまれている。マキアヴェリ、ブルーン、ガリレイ、ヴィーコの箇所を一見すれば明らかであろう。しかも著者の目は、文人、学者、知識人の世界にのみ注がれるのではなく、それを支えるものとしての民衆の世界にもむけられており、大衆の芸術、民間伝承、社会風俗についての叙述が、この文学史の大きな要素となっている。しかもそうした諸要因は、各論ふうにそれぞれ分離して、整理され論じられるのではなく、全体として有機的に統合され、各時代の、時代精神、言いかえれば運動し、発展する集団意志の流れとして、読者に呈示されているのである。

第二に、個々の作品、あるいは作家についての判断的確さ、大胆さである。広汎な視角のなかで、無数の複雑な要因をはらませながら、具体的に、文学作品の評価という面においては、デ・サンクティスは口ごもることはない。ときには強引とさえ思われる大胆、明快な判断の斧をふりおろす。一刀両断といった、自信にみちたおもむきがある。かりに読者が細部の判断において、デ・サンクティスの説に反撥し、反論をくみたてようとする。ところがいざその試みを実現しようとする段になると、それが容易ならざること気づく。デ・サンクティスの個々の判断の背後には、いわば精神史の巨大な全体像がひかえており、その判断は全体像のなかに有機的な一環として組みこまれているために、反論する側は、またかれなりの全体像を提出せざるをえない。そのとき、デ・サンクティスの判断の力強さ、鋭さの根拠が、はっきりと再認されることになる。この豪快な切れ味こそ、かれ独特の個性であって、他の文学史では得られない魅力のひとつであろう。

しかもかれの判断は、印象的な裁断批評でもなければ、国家統一期（リソルジメント）に流行した政治的イデオロギーのためのレッテル貼りでもない。あるいは文芸社会学派の、一定の図式を前提とし、その尺度にあわせて機械的に評価をきめる測定でもない。デ・サンクティスのばあいはいつでも、作品の味読と鑑賞、そこから得られる感動と陶醉とが先行している。たとえばダンテやペトルルカ、あるいはマキアヴェリの章を読めば、かれがいかに『神曲』や『カンツォネーレ』や『君主論』を愛していたかが実感されるであろう。かれは、冷静で打算的な批評家でなく、自分自身の主体的な感動から出発して、それを対象化してゆく過程のなかで視野を広め、批判を深めてゆく、そういう型の思想家であった。個々の作品と作家の人間性への理解という点で、かれはつねに温い愛情にみちている。血の通った、「生命力の漲っている」作品であれば、群小の作家の作品でさえも見落とさず、讃辞を惜しまなかった。また、のちに、ベネデット・クロッチェが強調し、かれ自身の哲学体系のなかで消化しようとした、美的価値の還元不可能性、詩の自律性を認める点において、かれはリソルジメント期の批評家として、まことに独自の地歩を占めていた。「詩人」および「空想力」という用語は、「芸術家」ならびに「想像力」という言葉と対照的に独特の意味で使われているが、そ

れは一面において一流の作家の創造力をいわば無条件で、最終的に認める定義でもあった。個々の作品、詩句にたいするかれの読みの深さ、大胆な判断力、この点を第三の魅力として、躊躇なく挙げる事ができる。

第四に、この『文学史』——あるいはイタリア「文明史」または「精神史」と呼ぶほうが適切ではないかと思われるが——の骨格をなしているダイナミックな、弁証法的な発展の論理である。若い頃に、ヘーゲルの哲学に親しみ、その書物を翻訳するまでに傾倒したデ・サンクティス、またヴィーコの歴史主義に早くから着目していたかれにとって、歴史的弁証法は身についた方法であって、ここではそれがみごとに使いこなされているという感じを受ける。とくに中世からルネサンスへ、ルネサンスからデカダニス期を経て新時代つまり近代へと至るイタリア精神史の大きな流れの底に、かれは弁証法的な発展の論理を置き、それを執拗に追求している。ことに中世の構造を超自然的、禁欲主義におき、ルネサンスの人間の、現実主義に對置させ、さらにルネサンス社会の否定的側面を、形式主義や知識人の政治への無関心、高邁なモラルの欠如などの特徴において捕捉し、さらに近世の啓蒙主義の運動に新たな前向きな精神を、すなわち合理的、科学的な思考を、歴史研究の芽生えをはっきりと見つけている。たとえば、チュエーリッヒ滞在の頃、かれの同僚であったブルクハルトの名著『イタリア・ルネサンスの文化』と、この『文学史』のボッカチオからマキアヴェリあたりの箇所を比較して読まれたれば、前者のきわだつて静態的な見方に対して、著者がどんなにダイナミックに、ルネサンス社会を捉えているかはきわめて明らかとなる。それでいて、かれの弁証法的な史観が、抽象的なイデアの勝利に終わるヘーゲル主義とはかなり趣きを異にしている点も見落とすことはできない。それは先にもふれたとおり、個々の作品の芸術的生命の前で、きわめて謙虚である著者の人柄と個性に負うものであり、そのことが芸術の歴史をたんに機械的に觀念の反映と考える批評とは明確に一線を劃させている。要するに、歴史の発展の論理の無限のヴァリエーションである文学作品、芸術作品の具体的な価値をめぐって、かれほど用心深く、また大胆であった批評家はなかったといっても過言ではなからう。

さて、デ・サンクティスの『文学史』はかれの死後、クローチェの監修した綿密な批評版（一九一二年、バリー、ラテルツァ社）が出るまでは、実証主義の文学研究者の偏見によってほとんど顧みられることがなかったが、その後今日まで、たんにイタリアのみならず西欧の芸術批評史において最重要の評価を与えられてきたことを最後に書き加えておきたい。ことに本国のイタリアにおいては、新しい文学の研究方法が欧米諸国において論議されるとき、つねにイタリア文芸批評の伝統的な拠りどころとしてデ・サンクティスの名がまっさきに引きあいだされてきた。たとえば比較文学、文体論研究、構造主義批評、そうした研究方法のどれをとりあげても、すでにかれのなかに、なんらかの形で問題提起がなされており、時代の先を読むその洞察力にあらためて感銘を

おぼえるのである。また、イタリアの文学、思想、歴史の研究を志す者が、研究の出発点にあたって最初に読まなければならない参考書は今日もこの本であろう。個々の作家研究にあたって、あるいは思想家・歴史家の研究において、研究者が論議の実験台とすべき最良の書物はデ・サンクティスであろう。

こう見てくると、この『イタリア文学史』は、研究者がたえず座右において参照するために必須の書物だといえることができるし、また専門の研究者にかぎらず、一般の読書人や文学研究者にとっても、けっして興味にとほしい本ではないことが分かる。

さてこの本を紹介したいというのは、私たちの長いあいだの念願であった。互いに検討しあいながら訳稿をまとめはじめたのが、もう五年前になる。その間にはいろいろの困難があり、障害があった。訳者のほとんどすべてが大学に職をもつものであるところから、最近はおさらであった。費やした時間に比較して、十全の出来といえないことは心苦しいが、ここに一応訳をえた。ちょうど『文学史』の刊行百年目にあたる今秋、出版のはこびに漕ぎつけたことで、私たち一同のよるこびははかりしれないものがある。これまで本書の出版にご援助と激励をいただいた人びとすべてに、深い感謝の意を表したい。

訳書は、第一巻中世、第二巻ルネサンス、第三巻近代の、三巻に分けて刊行される。この区分は、デ・サンクティスの最終的な構想にはほぼ照応するものと考ええる。なお第一巻、巻末にはデ・サンクティスの年譜を掲げ、第三巻の巻末には人名索引を附すことを予定している。訳の分担については、各巻ごとに記名してある。第一巻の翻訳は第一章より第四章、および第八章は池田廉の、第五章より第七章までは米山喜晟のものである。テキストは底本として *Storia della letteratura italiana di Francesco De Sanctis*, a cura di Luigi Russo, Milano (Feltrinelli) 1956 を用い、小見出しも同書のものに準じた。その他、歴史的に重要なクローチエの版 *Storia della letteratura italiana*, a cura di Benedetto Croce, Bari (Laterza) 1912. 引用の典拠について詳しく注をめぐり *"Storia" dai primi secoli agli albori del Trecento*, a cura di G. Lazzari, Milano (Hoepfl) 1950. 最新の『注目の諸版』 *"Storia"*, a cura di Carlo Muscetta (Einaudi) 1958. *"Storia"*, a cura di Niccolo Gallo (Einaudi) 1958, *ibid.* Milano (Ricciardi) 1961. *"Storia"*, con le note di G. Innamorati, Firenze (Sansoni) 1965 を参照した。

一九七〇年一月三十一日 京都

訳者を代表して

藤 沢 道 郎
池 田 廉

はしがき

i

第一章 シチリアの人たち

3

一 俗語の完成とシチリアの文化

5

二 シチリア文化とシチリア詩のもつ技巧

18

第二章 トスカナの人たち

31

一 トスカナ詩の特色

33

二 ガイド・グイニチェルリと修道士グイトーネ・ダレッツォ

44

三 ヤコポーネ・ダ・トーティと宗教詩

50

四 政治詩と学術的な詩

66

五 清新体派

74

六 青年ダンテと彼の抒情詩のアレゴリー性

80

第三章 ダンテの抒情詩

89

一 ペアトリーチェという理想像と彼の哲学への熱情

91

二 ダンテと《清新体派》の詩人たちの、想像の世界と空想力

98

第四章 散文

111

一 騎士道ものと《古譯百種》

113

二 新たな世俗の学問、ブルネット・ラティーン

118

三 倫理講話と作り話。ポーノ・ジャンポーニ

123

第五章 聖史劇と幻覚詩

129

一	十三世紀文学の二つの源泉——騎士物語と宗教文学	131
二	宗教劇	137
三	宗教劇の特色——抽象性と物質性	157

第六章 トレナエンツト 千三百年代の文学

一	聖者の文学	167
二	カテリーナ・ダ・シエーナ	174
三	俗語の歴史と年代記	180
四	ダンテの教育的著作	199
五	民衆文学と教養人の文学に共通している抽象性について	209

第七章 『神曲』

一	『神曲』の学問的起源と民衆的起源	215
二	『神曲』におけるアレゴリーと詩 ^{ポエジー}	217
三	『神曲』の倫理的・政治的生成とダンテの宗教感情	220
四	ダンテの彼岸の世界とそこに反映した世俗の生活	240
五	『地獄篇』の芸術的優位性の根拠	248
六	『地獄篇』の主要な人間像	257
七	現世の回想としての『浄罪篇』	273
八	『天国篇』の展開	282

第八章 『カンツォニエーレ』

一	ペトラルカと美しい形式の趣味	355
		357

二	愛の描写と女性描写	365
三	ペトラルカの愁い	372
四	ラウラ死に寄せる詩 <small>リイム</small>	381

註	387
年譜	407

凡例

- 一、本書の翻訳にあたって用いた諸版については、「はしがき」の末尾に列挙した。
- 二、原著はイタリア語の版（たとえばサンソーニ版）において約八〇〇ページにおよぶ大著であるが、本訳書ではこれを三巻にわかれ、第一巻「中世篇」は原書の第一章～八章とその註、第二巻「ルネサンス篇」は第九章～十六章とその註、第三巻「近代篇」は第十七章～二十章とその註を収めた。なお著者年譜を第一巻に、人名索引を第三巻に附した。
- 三、固有名詞については、わが国で普通に用いられている呼び方を尊重したが、原則としては原地原音主義に従った。ただし、イタリア名で呼ぶ必要を認めた場合、二行割註を付して読者の便宜をはかった。例、ヴィルジリオ（リウス）（リウス）。
- 四、原著者が引用箇所その他に用いている《》の箇所については、短い場合《》を、長い場合「」を付した。
- 五、作品名には二重括弧『』を付した。
- 六、本文中における二行の割註はいずれも訳者の補註である。
- 七、原著には、各章の見出しのほかに、それより以下の細分や小見出しはない。本書では、『はしがき』で述べたとおり、ルイジ・ルッソ版が採用した小見出しを各章に付した。

第一章



フェデリーコ二世のパレルモの宮廷には、自由で知的な環境に憧れる詩人や学者たちが、イタリア各地から集ってきた。皇帝自身、詩を書き、ラテン語で『鷹狩術』を著した。その古写本の細密画は当時の宮廷人の風俗を語ってくれる。

一 俗語の完成とシチリアの文化

イタリア文学の最古の文献はふつう、チュルロ（ヴァインチェンツォの縮小辞）・デイ・アルカモ（このカンツォーネ、別名歌謡であるとも、フォルカッキエーロ・ダ・シエーナ）のカンツォーネであるとも考えられている。

この二つの詩のどちらが古いかという話は、そもそもこの二篇がそれだけである文学の一時代を開くものではなく、たんにその一部にすぎない以上、幼稚な議論にすぎない。その一時代とは、きわめて古い時期におこり、フェデリコ（リッヒド）二世の治下に、隆盛の極に達したものであり、シチリアの人たちという名称もそこから発した。

ドイツ皇帝で、シチリア国王のフェデリーコ二世は、ダンテから、《偉大な聖職者》（すなわち最高の学者と呼ばれたが、『古譚百種』のなかでは、《いと高貴な人》であり、彼のバレルモの宮廷には、《才知のある人々、演奏家、吟遊詩人、達者な語り手たち》が群れ集まったとある。要するに、当時の詩人は、イタリアの各地から来た人がかなり多かったにもかかわらず、《シチリアの人たち》（と呼ばれていたのである。

さてチュルロの歌謡とはどんなものだったか。

愛する男と夫人マドンナとの間の掛けあいの詩、あるいは対話である。男は思いこがれる、夫人は拒みつづける。だが終いに女が許す。いつの時代にもまたどこにでもあるごくありふれた民謡の主題であり、たとえば当今でも、フィレンツェの『おしゃれ男と婦人帽子屋の歌』⁽⁶⁾などに見られるとおりである。

応答はそれぞれ、八行詩の一詩節からできている。一詩節は、ズドゥルチョリ(舞床から三つ目の繰りにア)三行と同韻三行の計六行の七音綴詩と、さらに同韻の二行の十一音綴詩とからなる。用語はまだ粗野であり、文法形式や語尾変化の点で不安定であり、シチリアやナポリの語彙、プロヴァンス語、フランス語やラテン語の語彙が混じっている。このうちの二節を、例に引いてみよう。

恋人

心の頑かたくなな女どもは多いもの、

男は言葉巧みに、

女に迫り口説く

女をわがものにするまでは、

彼女の尻を追い廻す。

男を拒みきれぬ女性など

この世にいない。美しき女よ、

どうか悔いを残さぬように。

夫人